

D. W. Griffith と小津安二郎のインターテキスト的連関

前川道博@長野大学

D. W. Griffith(1875-1948)の初期作品には、小津安二郎(1903-1963)のそれと極めてよく似たシステムが同定できる。規則化されたカメラの定位置固定撮影、同一カメラ位置の反復使用、時間を省略しないショット分節等、要素技法の組織化運用である。Griffith の *The Lonedale Operator*(1911)では、同じ場面では時間は省略されることなく、人の空間内の移動=動きがカメラ位置の転換とショット分節を動機づけている。映画初期の映画の特徴として、場面転換が人物の移動に沿ってなされる動的構成であること、パラレルアクション中心の構成である点などが挙げられる。この分節は、時間軸と動きの対象を動的に再構成する形式論理に従ったものである。*A Girl and Her Trust* (1912)もほぼ同じ内容と構成の作品である。

小津がアメリカ映画、とりわけ Ernst Lubitsch の強い影響を受けていたことはよく指摘されている。しかしながら小津に最も類似した特徴を備えているのは Griffith の初期作品である。この点、先行研究では指摘されることがなかった。

小津作品に Griffith と類似する表現が顕著に現れるのは不思議なことに年代が下ったトーキー以後である。特に『晩春』(1949)における玄関の出入り場面の反復、『麦秋』(1951)における間宮家場面での人物の絶えざる室内移動は *Lonedale* を彷彿とさせる。*Lonedale* においては人物の動きと移動により分割された連続空間が A(ホーム)→B(駅舎入口)→C(駅舎内)→D(電信室)と連結・継起する。『晩春』では、A(家の前の道)→B(玄関)→C(茶の間)と連結・継起する。

Griffith と小津のインターテキスト的連関の証明は困難である。しかし、小津作品における人物の動きに沿った移動空間の分節、動きの分節が極めて共通性が高いことを実証した。こうした特徴を備えた作品は映画初期において見られるものの、トーキー期においては類例を見出せない。特に小津がトーキー期、とりわけ戦後の代表作『晩春』『麦秋』『東京物語』(1953)等における《動きの連続=時間の分節》には、映画初期の原初的技法と捉えられる厳格なまでの組織化が見られる。これは小津の形式システムにおける映画初期モード、とりわけ Griffith と類似したモードのインターテキスト的連関と捉えられるものである。